

# 学習者による漢字力の自己評価について

— Can-do Statementsによる漢字力意識調査から —

加納 千恵子 魏 娜

## 要 旨

近年の言語能力評価の動きとして、言語知識よりも実際のコミュニケーション場面における言語の運用能力を重視しようとする傾向がある。その際、「～ことができる」という能力記述文 (can-do statements) が使われるようになってきている。本稿では、漢字に関して学習者自身がどのようなことができると自己評価しているかをみる目的で作成したcan-do statements形式の質問紙による調査の結果について検討し、学習者の漢字力の自己評価のあり方について考察した。

【キーワード】 言語能力評価 can-do statements 漢字力 自己評価

A Study on Self-Assessment of Kanji Ability :  
a survey of learners' awareness concerning their working  
knowledge of kanji by using a can-do statements form

KANO Chieko, WEI Na

[Abstract] Recently in second-language education, assessment of learners' working knowledge of language in practical communication scenes has become more important than evaluating one's linguistic knowledge. In such assessment, "can-do statements" forms have become more commonly used. In this paper the authors discuss the results of a survey of learners' awareness concerning their working knowledge of kanji by using a "can-do statements" form, and consider the ways that learners self-assess their kanji ability.

[Keywords] assessment of language ability, can-do statements, kanji ability, self-assessment by learners

## 1. はじめに

近年の言語能力評価の動きとして、言語知識よりも実際のコミュニケーション場面における言語の運用能力を重視しようとする傾向があり、欧州評議会によるCEFR（言語のためのヨーロッパ共通参照枠）、国際交流基金による新日本語能力試験やJF日本語教育スタンダードなどでは、「～ことができる」という能力記述文（Can-do statements、以下Cdsと略す）が使われるようになってきている。このような能力記述文は、学習目標として使用されることが多いが、同時に教師による学習者の能力評価や、学習者自身による自己能力評価にも使うことができると考えられる。

日本語は、ひらがな・カタカナという2種類の表音文字を併用する上に、さらに表語文字（あるいは表形態素文字）である漢字の混用という、世界に類を見ないような複雑な表記システムを有している。そのため、日本語教育においては漢字が大きな障害の一つと捉えられ、漢字力をどのように評価すればよいか大きな課題となっている。この課題を解決するための糸口として、漢字に関する知識や漢字の運用能力について学習者自身がどのように「できる」あるいは「できない」と意識しているかを探るという目的で、Can-do statements形式の調査紙を作成し、調査を行った（加納 2014a, 2014c）が、それらは2013年2月～3月に日本国内にいる留学生を対象に実施されたものであり、中国などからの漢字圏学習者がその大半を占めていた。

そこで、本研究では、非漢字圏であるメキシコの学習者と、漢語文化圏と考えられる韓国の学習者を対象に、漢字に関する同じ意識調査と漢字テストを実施した結果を先行研究の結果と比較する。文化圏による評価の違い、および運用力のレベルによる評価の違いなどを分析考察し、学習者による漢字力の自己評価の可能性の検討することにより、日本語教育における漢字力評価のあり方について提言したい。

## 2. 漢字に関するCan-do statements

漢字に関する知識および運用力は、漢字に含まれる4つの情報、すなわち形、音（読み）、義（意味）および用法に分けて考えることができる。それぞれの情報に関して、レベルに応じて達成されると思われる漢字力をCdsの形式で記述した2013年版の調査紙は、漢字の構成要素である「部首」や「音符」に関する項目を加えた50のCds項目からなっている<sup>1</sup>。そして、それぞれの項目に関して、「4. 強くそう思う」「3. そう思う」「2. そう思わない」「1. 全然そう思わない」「0. わからない」という5段階の選択肢を用意した。

加納（2014a, 2014c）では、50のCds項目を、意味に関する18項目、読みに関する18項目、書きに関する6項目、用法に関する6項目、構成要素に関する2項目というふうに分類したが、本稿では、調査の結果を踏まえて次のように再分類する。具体的には、以下の10、39、40の3項目を構成要素に関する項目とする。

10. 「言」「糸」「女」「雨」など、漢字の部首の意味がわかる
39. 「糸へん」「雨かんむり」「門がまえ」など、よく使われる漢字の部首が書ける
40. 知らない漢字でも音符がふくまれている漢字なら読み方が推測できる

また、以下の44、45、48、49の4項目を意味に関する項目から用法に関する項目に移す。

44. 「愛読する」「暴落する」「常用する」などの漢語動詞の意味用法がわかる
45. 「危険」「健康」「豊富」「深刻」などの漢語形容詞の意味用法がわかる
48. 「務める」と「努める」と「勤める」など同じ読みの語の意味用法の違いがわかる
49. 「習慣」と「慣習」と「慣例」と「風習」など、類義語の意味用法の違いがわかる

その結果、本稿で扱う50のCds項目は、以下のように再分類される。

意味に関するCds	13項目
読みに関するCds	17項目
書きに関するCds	5項目
用法に関するCds	10項目
構成要素に関するCds	5項目

また、本調査においては、「0. わからない」という回答を選んだ協力者がいなかったことから、「4. 強くそう思う」「3. そう思う」「2. そう思わない」「1. 全然そう思わない」という4段階の評価としてデータを処理することとした。

### 3. 調査の概要と結果

今回実施した調査の概要は、以下のようであった。

調査時期：2013年6月～10月

調査場所：メキシコの大学および語学校  
          韓国の大学

調査対象：メキシコ 42名  
          韓国 39名  
          合計 81名

調査内容：漢字力テスト（漢字SPOT50<sup>2</sup>）

          Cds形式による漢字に関する意識調査

実際の調査協力者は110名（メキシコ50名、韓国60名）だったが、同時に行った漢字SPOTテストおよび漢字力診断テスト<sup>3</sup>の結果により明らかに初級と思われる者や欠損データを除き、調査対象を上記81名の中上級者のみとした。

### 3.1 調査協力者の漢字力

81名の調査協力者の漢字の運用力を調べるために実施したWEB版漢字SPOT50の結果を図1に示す。図1の縦軸は人数、横軸は漢字SPOTテストの正答率の範囲である。メキシコの調査協力者42名の平均正答率は50%であり、韓国の調査協力者39名の平均正答率は67%であった。

図1をみると、メキシコの調査協力者は、正答率49~40%のところと59~50%のところに最も多く集まっていること、また39%以下の者が7名もいたことがわかる。

それに対して、韓国の調査協力者の方は、正答率69~60%のところが多くなり、次に多いのが79~70%で、50%以下の者は少なかったことがわかる。したがって、今回の調査において、メキシコの調査協力者に比べると、韓国の調査協力者の方が漢字運用力が高い集団であったと言える。

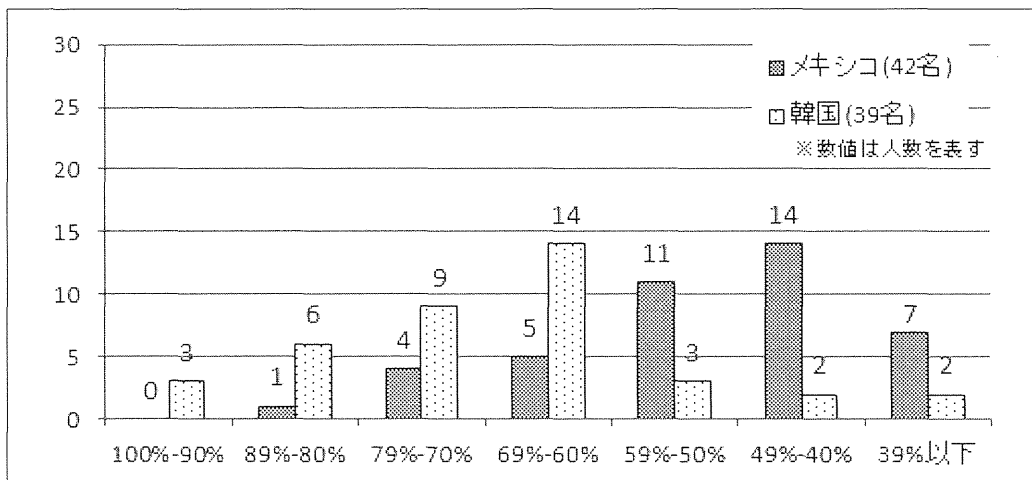


図1 調査協力者(81名)の漢字SPOTテストの正答率

これを2013年2月~3月にかけて日本国内にいる学習者を対象に実施した前回の調査の結果(加納2014a, 2014c)と比べてみよう。前回の調査対象は、筑波大学留学生センターなど国内にいる漢字圏(中国)の学習者83名と、それ以外の非漢字圏学習者34名(韓国10名を含む)の計117名であった。漢字SPOTの平均正答率は、漢字圏が87%、非漢字圏が78%となっており、図2に示すように、今回の調査協力者と比べると、全般的に漢字の運用力が高かったことがわかる。

これらの日本国内の調査協力者は、非漢字圏でも、正答率84%~80%のところに最も多く集まっており、漢字圏では、90%以上の学習者が多く、天井効果を示していたことがわかる。

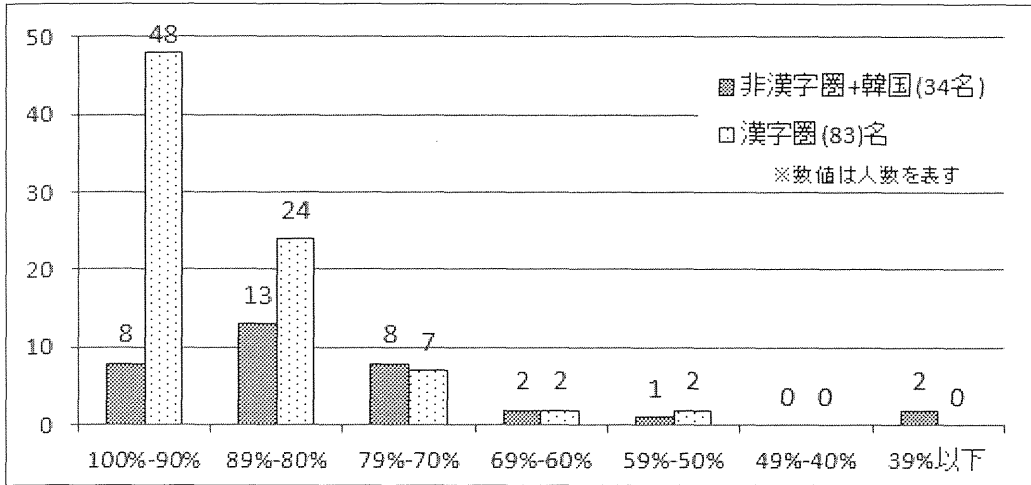


図2 前回調査協力者 (117名) の漢字SPOTテストの結果

### 3.2 Cds調査の結果

#### 3.2.1 文化圏による結果の検討

今回の81名の調査協力者のCds調査における評価の平均をまとめたのが表1である。非漢字圏であるメキシコにおいては、意味、読みに関する自己評価と比べて、書きおよび用法に関する評価が著しく低いことがわかる。一方、韓国の学習者の方も、意味、読みに関する自己評価に比べれば、書きおよび用法に関する評価が低くなっているが、それほど大きな差ではないことがわかる。構成要素に関しては、メキシコ、韓国を問わず「できる」意識が高いとは言えないという結果となっている。

表1 調査協力者 (81名) のCds調査の結果

	メキシコ (42名)	韓国 (39名)	全体 (81名)
意味に関するCds	3.5	3.6	3.6
読みに関するCds	3.3	3.4	3.4
書きに関するCds	2.4	2.8	2.6
用法に関するCds	2.5	2.9	2.7
構成要素に関するCds	2.9	2.8	2.9
平均評価	2.9	3.1	3.0

(※数値は評価の平均を表す)

このCds調査の評価の平均をグラフにしたものが図3である。縦軸が評価の数値、横軸がCdsの項目である。漢字の運用力において、メキシコの学習者グループより韓国の学習

者グループの方が高かったにもかかわらず、漢字の意味と読みに関する「できる」意識は、ほとんど変わらず高かったことがわかる。また、構成要素に関する意識についても両者にはほとんど差がなく、意味・読みより低くなっている。ただ、どちらのグループにおいても、漢字の書きおよび用法に関する「できる」意識は低かったが、非漢字圏であるメキシコの学習者は、韓国の学習者よりさらに漢字の書きや用法に対する苦手意識があるらしいことが示唆された。

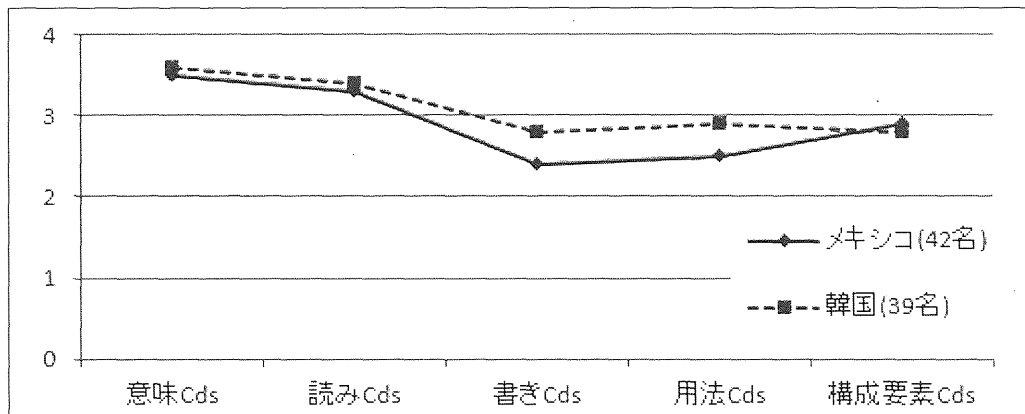


図3 今回の漢字Cds調査における評価の平均

ここで、前回の国内の調査協力者117名のCds調査における評価の平均をまとめた表2を見てみよう。全体的には、今回の海外の調査協力者と比べると、「できる」意識が高いという結果になっている。これは、前回の調査協力者の方が、今回の海外の調査協力者と比べて、漢字の運用力が高かたことに起因すると思われる。しかし、韓国を含む非漢字圏学習者において、意味、読み、用法に関する自己評価と比べて、書きに関する評

表2 前回調査協力者(117名)のCds調査の結果

	非漢字圏+韓国 (34名)	漢字圏(83名)	全体(117名)
意味に関するCds	3.8	3.6	3.7
読みに関するCds	3.5	3.4	3.5
書きに関するCds	2.7	3.2	3.0
用法に関するCds	3.4	3.2	3.3
構成要素に関するCds	2.9	2.9	2.9
平均評価	3.3	3.3	3.3

(※数値は平均を表す)

価が著しく低くなっていたことがわかる。また、漢字の構成要素に関する「できる」意識が低いことも、今回のCds調査の結果と共通している。

前回のCds調査の平均評価の結果をグラフにしたものが以下の図4である。図4を見ると、加納(2014a)でも指摘したように、国内の漢字運用力の高い学習者でも、非漢字圏の場合は、漢字の書きに対する苦手意識が依然として存在していることがわかる。しかし、漢字の用法については、漢字圏学習者より非漢字圏学習者の方が「できる」意識が高いことが見てとれる。一方、漢字圏学習者の方は、得意なはずの書きに関する自己評価がそれほど伸びておらず、全体的にどの項目の評価にもあまり差がないという結果になっている。漢字圏学習者は、このような「自己評価」というものに対して不慣れで、正しく評価できていない可能性があるとも推測される。構成要素に関しては、非漢字圏、漢字圏を問わず「できる」意識が低いことが指摘できる。

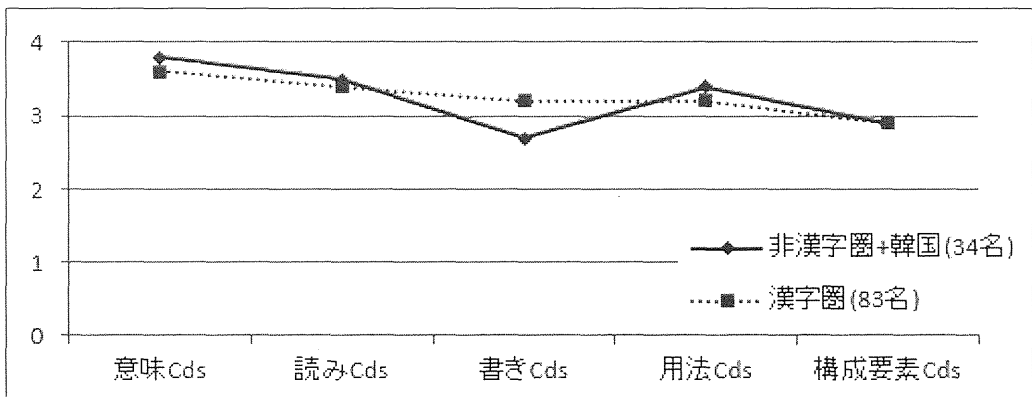


図4 前回の漢字Cds調査における評価の平均

今回の調査結果を前回の結果と合わせてまとめると、以下のようになる。

- (1) 漢字の意味がわかる、読めるという意識は、国内外を問わず、また非漢字圏、漢字圏、韓国という文化圏を問わず、かなり高かった。
- (2) 漢字の構成要素に関する「できる」意識は、国内外を問わず、また非漢字圏、漢字圏、韓国という文化圏を問わず、あまり高くなかった。
- (3) 漢字の書きに関する意識は、文化圏によって、またレベルによって差が見られた。特に、非漢字圏学習者の場合、漢字の運用力が高い国内の学習者であっても「書けない」という意識が強く、運用力のレベルが低めのメキシコの非漢字圏学習者にはかなり顕著に苦手意識が見られた。韓国の学習者も、漢字圏学習者に比べると、「書く」ことに対する評価が低かった。

- (4) 漢字の用法に関する意識は、メキシコの新漢字圏学習者において顕著に低かったが、韓国の学習者、国内の漢字圏学習者においても高いとは言えない結果となった。
- (5) 国内の漢字圏学習者は、得意だと思われる項目についてもあまり高くは評価しておらず、全般的に評価に差が見られなかった。これは、Cdsという形式の自己評価に慣れておらず、自分の知識・運用力を正しく評価できていない可能性もあると思われる。

加納 (2014a) では、漢字圏 (中国) の学習者が新漢字圏学習者に比べて、得意だと思われる項目と不得意な項目との間に評価の差をつけておらず、Cds形式による自己評価には課題があることを指摘した。今回の調査から、韓国の学習者についても、中国の学習者ほどではないものの、メキシコの学習者と比べると、各項目の評価差が小さいことが指摘できる。ただ、当然のことながら、漢字圏学習者の中にも、韓国や新漢字圏の学習者の中にも、自分の能力を過大評価する傾向にある者と、過小評価する傾向にある者があり、グループの平均的評価を見るだけでは、結論を出すことはできまい。また、文化圏による違いを明らかにするためには、さらに調査協力者の数を増やす必要もあろう。

### 3. 2. 2 Cds項目による結果の検討

前回の調査では、項目ごとの分析はできなかつたため、今回の調査結果については、Cdsの項目毎にその結果を検討したい。具体的には、意味に関する13項目、読みに関する17項目、書きに関する5項目、用法に関する10項目、構成要素に関する5項目のそれぞれについて、メキシコの調査協力者と、韓国の調査協力者の自己評価の結果について検討する。

まず、図5はメキシコの調査協力者42名による、漢字の意味に関するCds項目について、選択肢4 (強くそう思う)、選択肢3 (そう思う)、選択肢2 (そう思わない)、選択肢1 (全然そう思わない) を選んだ割合を示したものである。

漢字の意味に関するCds項目1～9を以下に示す。1～8の項目についてはほとんど全員が選択肢4を選んでおり、9の項目については4を選んだ者は半分ほどに減っているが、3を選んだ者と合わせると、肯定的評価が大半を占めていることがわかる。これは、中上級のレベルでは単漢字の意味は分かっていると意識している者が多いことを示している。

1. 「山」「川」「木」などの漢字をみて、その意味がわかる
2. 「月」「火」「水」などの曜日の漢字をみて、その意味がわかる
3. 「五十円」「三百円」など、漢字の数字で書いてある値段がわかる
4. 駅の「北口」「東口」「西口」「南口」などの意味がわかる
5. 「目」「口」「手」「足」など、体の部分の漢字がわかる
6. 「魚」「鳥」「馬」「牛」など、動物の漢字がわかる
7. 「父」「母」「兄」「妹」など、家族をあらわす漢字がわかる



- 8. 「上」「下」「中」「前」など、位置をあらわす漢字がわかる
- 9. 「女」と「子」で「好」、「日」と「月」で「明」など、漢字の組み合わせで意味がわかる

それに対して、漢字の意味に関する項目26、29、41、43は、単漢字ではなく漢字熟語の意味理解に関するCdsであるため、図5を見ると、選択肢4の割合が大きく減り、否定的評価をしている者が増えていることがわかる。

- 26. 日常生活でよく見る漢字語の意味がわかる
- 29. 自分の専門分野でよく見る漢字語の意味がわかる
- 41. 3字漢語、4字漢語、5字漢語などの長い漢字のことばを見て、意味の構成がわかる
- 43. 「勝つ」の反対語、「硬い」の反対語、「収入」の反対語、「拡大する」の反対語などがわかる

それでも、26の日常生活語については、半数近くが選択肢4を選んでいるが、29の専門語や、41の長い漢語、43の反対語については、選択肢2（そう思わない）や選択肢1（全然思わない）の割合が多くなっている。つまり、単漢字の意味は分かっているが、漢字の意味構成や構成要素の意味に関する知識を持っている者は限られていると解釈でき、このことは、構成要素に関するCds項目に対する「できる」意識が低かったことによっても裏付けられると考えられる。

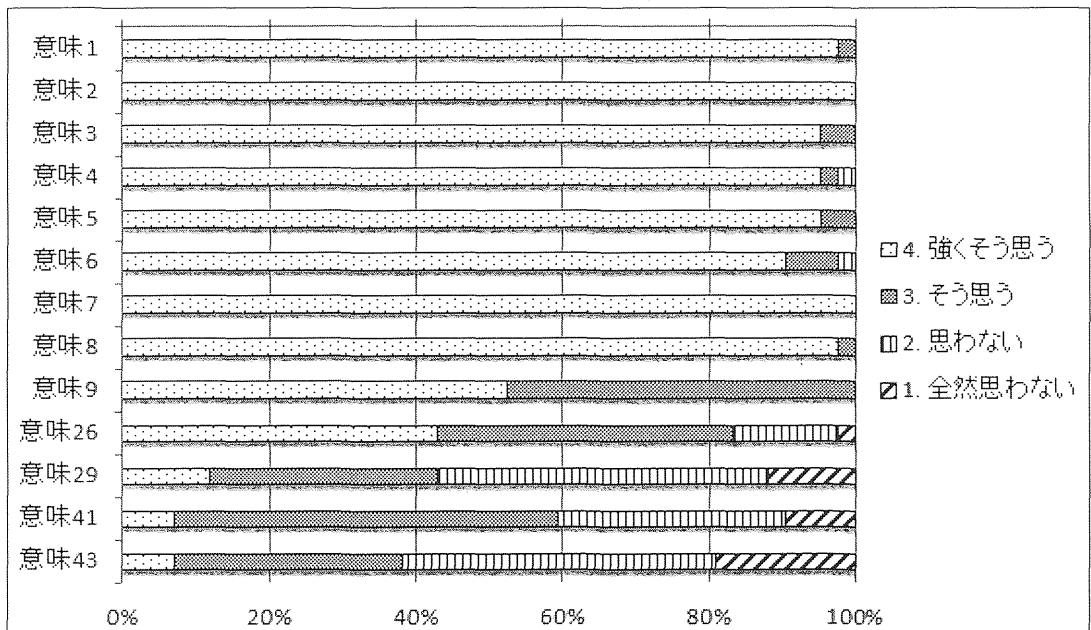


図5 漢字の意味に関するCds項目の評価（メキシコ42名）

漢字の意味に関する項目1から9についての傾向は、図6のように、韓国の調査協力者（39名）にも同様に見られる。しかし、漢字熟語の意味理解に関する項目26、29、41、43について、

漢語文化圏と考えられる韓国の学習者の方は、選択肢4、3という肯定的な評価が多くなって  
いるところが若干メキシコの学習者とは異なることがわかった。

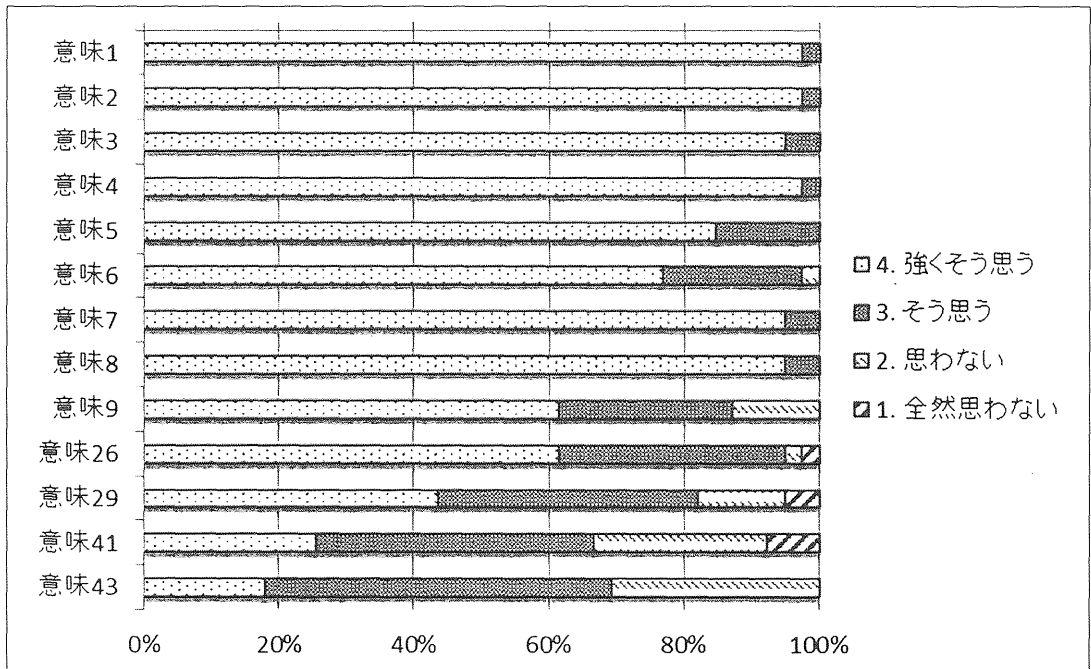


図6 漢字の意味に関するCds項目の評価(韓国39名)

漢字の読みに関するCds項目12および14~22を以下に示す。図7は、これらの項目に対するメキシコの調査協力者42名の評価結果である。図7をみると、12および14~22の項目に対しては、ほとんど全員が選択肢4か3という肯定的評価を選んでいることがわかる。

- 12. 漢字の読み方は一つだけではない(音読みと訓読みがある)ことがわかる
- 14. 「大きい」「小さい」「長い」「古い」など、やさしい形容詞の漢字が読める
- 15. 「行く」「来る」「食べる」「話す」など、やさしい動詞の漢字が読める
- 16. 「朝」「晩」「毎日」「今週」など、時をあらわす漢字が読める
- 17. 「元気」「不便」「有名」など、やさしい形容詞の漢字が読める
- 18. 「父」「母」「兄」「妹」など、家族をあらわす漢字が読める
- 19. 「上」「下」「中」「前」など、位置をあらわす漢字が読める
- 20. 「図書館」「駅」「病院」など、場所をあらわす漢字が読める
- 21. 「練習する」「質問する」「研究する」などの漢語動詞が読める
- 22. 「文学」「歴史」「政治」「経済」など、科目の漢字が読める

しかし、日常生活語の読みに関する項目27では、選択肢4が半分以下に減っているもののまだ肯定的評価が多いのに対して、30の専門語、34の音読み語、35の訓読み語、36の特別な読み方の語、46や47の複数の訓読みや音読みを持つ語になると、肯定的評価の割合が減り、否定的評価の割合が増えていることがわかる。

- 27. 日常生活でよく見る漢字語の読み方がわかる
- 30. 自分の専門分野でよく見る漢字語の読み方がわかる
- 34. 音読みの漢字語なら、だいたい読める
- 35. 訓読みのことばなら、だいたい読める
- 36. 特別な読み方のことばでも、だいたい読める
- 46. 「怒り」と「怒る」、「著しい」と「著す」、「頼む」と「頼る」など、異なる訓読みがわかる
- 47. 「精神」と「精進」、「希望」と「所望」、「重役」と「使役」など、異なる音読みがわかる

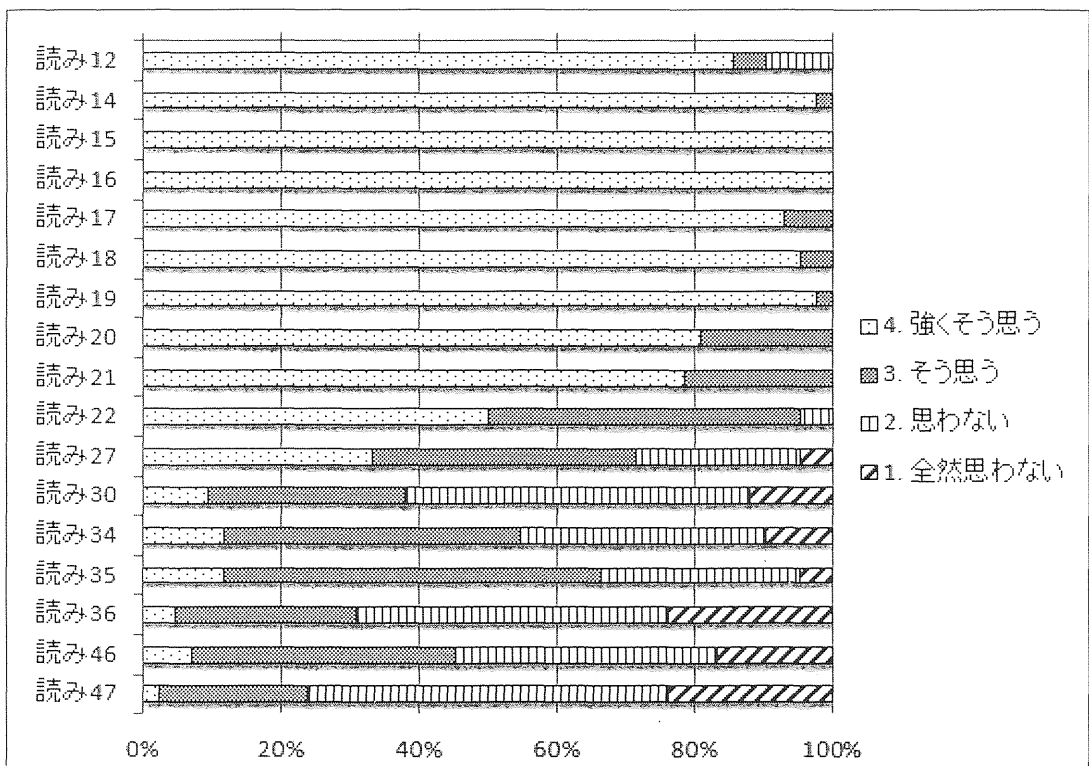


図7 漢字の読みに関するCds項目の評価 (メキシコ42名)

韓国の調査協力者 (39名) の結果を図8に示す。漢字の読みに関するCds項目12および14~21に関しては選択肢4の評価が多いこと、22については選択肢4は減るものの、まだ肯定的評価の方が圧倒的に多いことがメキシコの場合と共通している。しかし、メキシコの

学習者とは若干異なり、27の生活日常語の読みについての韓国の学習者の評価は、22とほぼ同様に肯定的評価の方が多かった。30、34、35、36、46、47について否定的評価が増えることは両グループに共通して見られるが、細かく見ると、メキシコの学習者が34の音読み語より35の訓読み語の方が読めると肯定的に回答している者が多かったのに対して、韓国の学習者は、34の音読み語の方が35の訓読み語より読めると肯定的に回答している者が多いことがわかる。これは、46の異なる訓読みと47の異なる音読みについても同じであり、メキシコの学習者は訓読みの方が肯定的評価が多いのに対して、韓国の学習者は音読みの方が肯定的評価が多いという結果になっている。

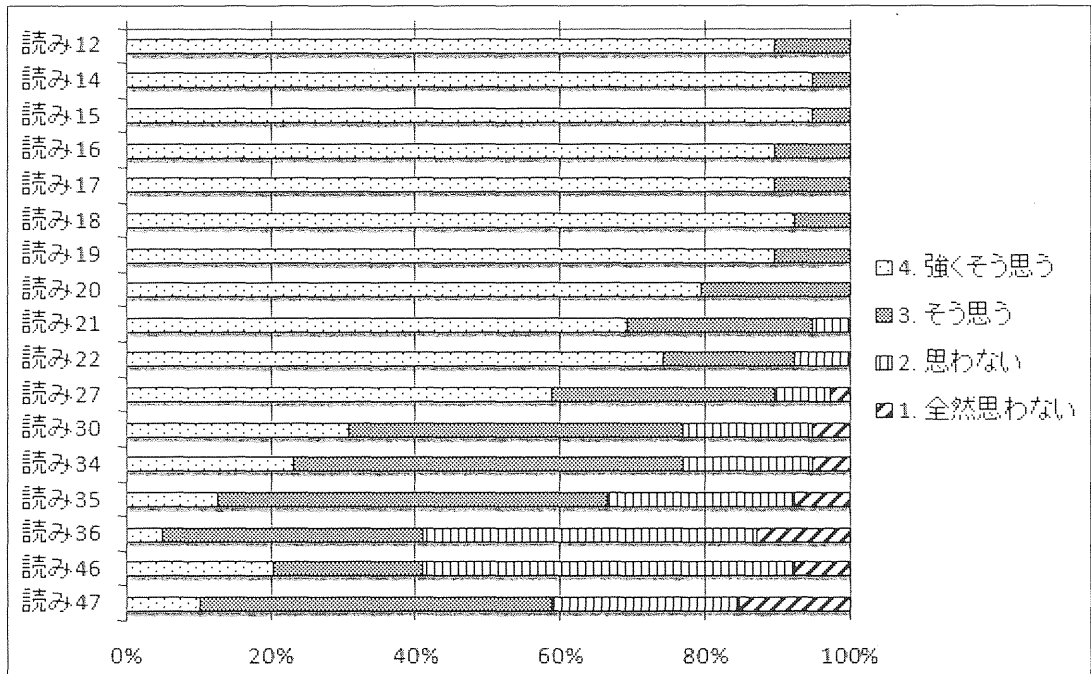


図8 漢字の読みに関するCds項目の評価(韓国39名)

漢字の書きに関するCds項目28、31、37、38、50は、以下の通りであり、それらの評価結果を図9と図10に示す。図9はメキシコの調査協力者42名の評価結果であり、図10は韓国の調査協力者39名の結果である。

- 28. 日常生活でよく見る漢字語を自分で書ける
- 31. 自分の専門分野でよく見る漢字語を自分で書ける
- 37. 知っていることばなら、漢字で正しく書ける
- 38. ワープロを使えば、正しい漢字が選べる
- 50. 「こうがい」、「ほけん」、「きげん」などの同音語を漢字で書くことができる

漢字の書きに関しては、全般的に、メキシコ、韓国とも否定的評価が多いという結果になっているが、やはり韓国の学習者と比べても、メキシコの学習者は否定的評価をする者がかなり多いことがわかる。その中で、項目38については、両グループとも選択肢4および3の肯定的評価の割合が多いことは特筆すべきであろう。手で書くことはできなくても、ワープロを使えば書けるという意識がかなり強いことがわかる。

また、31の専門語については、書くことに対する自己評価が低いだけではなく、29の意味および30の読みについても否定的評価があるのに対して、28の日常生活語については、26の意味および27の読みについてはほとんどの者が選択肢4を選んでいるのに対して、書きになると急に否定的評価が多くなっていることがわかる。

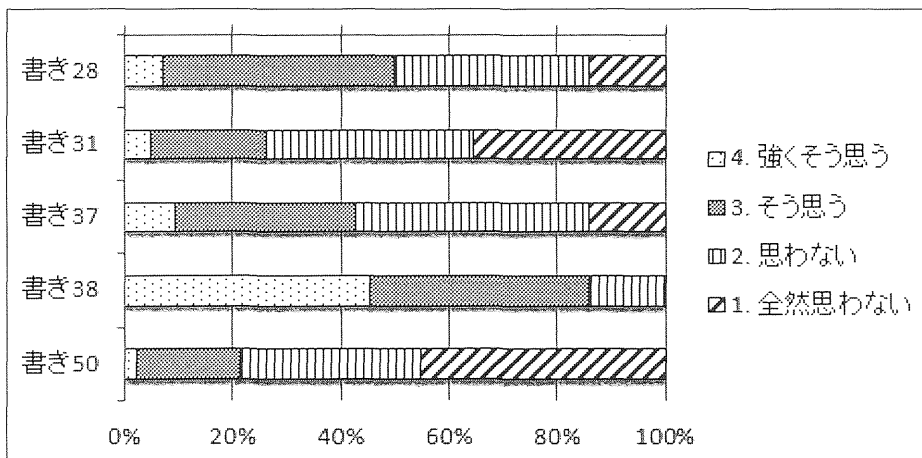


図9 漢字の書きに関するCds項目の評価（メキシコ42名）

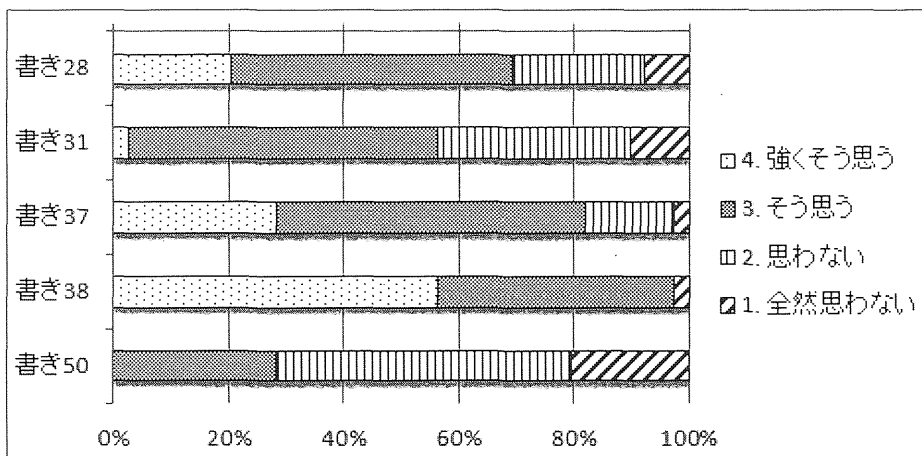


図10 漢字の書きに関するCds項目の評価（韓国39名）

漢字の用法に関するCds項目23～25、32、33、42、44、45、48、49を以下に示す。この調査では、中級段階で問題となる接辞の用法、品詞による語の使い分け（名詞、和語動詞と漢語動詞、漢語形容詞など）、同音語や類義語の使い分けに焦点を当てて、Cdsを作成した。

- 23. 「運転手」の「手」、「音楽家」の「家」、「会社員」の「員」などの接尾辞の使い方がわかる
- 24. 「無意味」の「無」、「不自由」の「不」、「非公式」の「非」などの接頭辞の使い方がわかる
- 25. 「増える」と「増加する」、「減る」と「減少する」、「移る」と「移動する」など、和語動詞と漢語動詞の使い方のちがいがわかる
- 32. 漢字のことばを見ると、名詞か、動詞か、形容詞かなど、その品詞がわかる
- 33. 漢字のことばを文中で正しく使うことができる
- 42. 「再」「超」「総」「値」「帯」「率」など、接頭辞や接尾辞になる漢字の使い方がわかる
- 44. 「愛読する」「暴落する」「常用する」などの漢語動詞の意味用法がわかる
- 45. 「危険」、「健康」、「豊富」、「深刻」などの漢語形容詞の意味用法がわかる
- 48. 「務める」と「努める」と「勤める」など、同じ読みのことばの意味用法の違いがわかる
- 49. 「習慣」と「慣習」と「慣例」と「風習」など、類義語の意味用法の違いがわかる

それらの評価結果を図11（メキシコの調査協力者42名）と図12（韓国の調査協力者39名）に示す。

メキシコの学習者も韓国の学習者も、23.や24.のような初級で目にする接尾辞や接頭辞については共通して「できる」意識の者が多かったのに対して、42.のような中上級の接尾

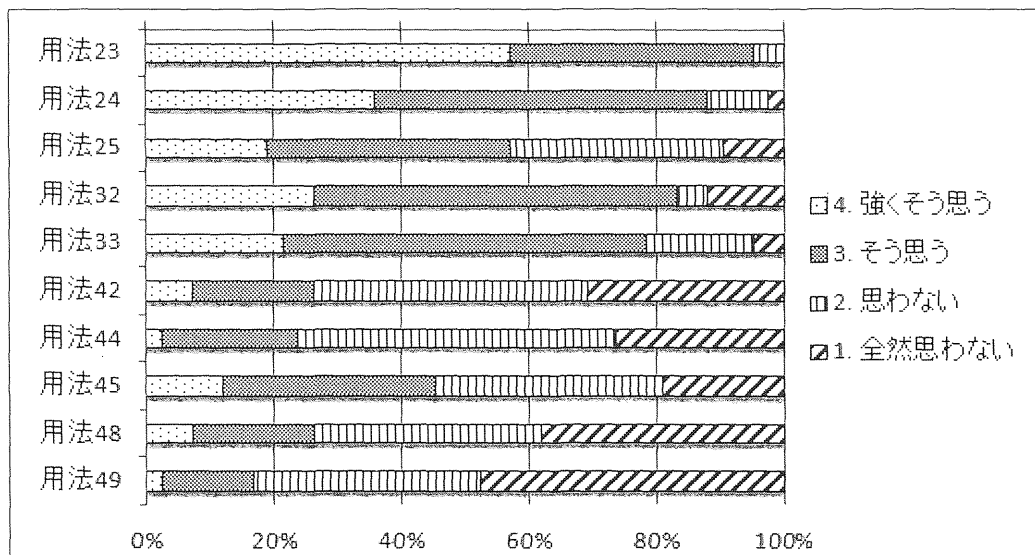


図11 漢字の用法に関するCds項目の評価（メキシコ42名）

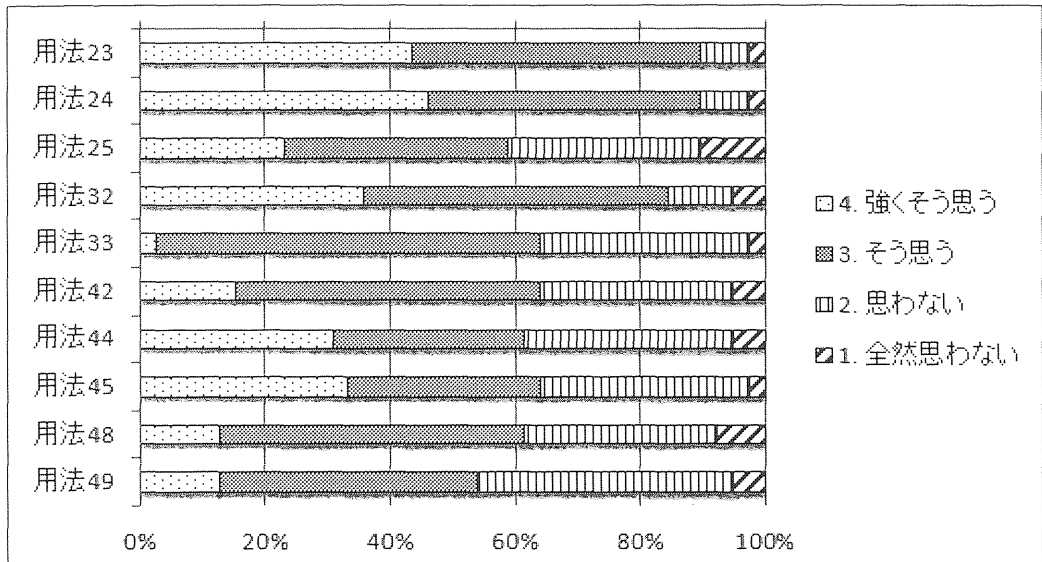


図12 漢字の用法に関するCds項目の評価 (韓国39名)

辞・接頭辞となると、評価に差が見られた。漢語文化圏である韓国の学習者は、42にも肯定的評価をしている者が多かったのに対して、非漢字圏のメキシコの学習者は否定的評価が多いように見受けられた。また、44、45、49のような漢語の用法の評価もメキシコの学習者の方が低かった。しかし、これは非漢字圏であるという理由より、日本語の運用力のレベルがまだ低いことによる語彙不足であることも考えられる。

最後に、漢字の構成要素に関するCds項目10、11、13、39、40について見てみよう。

10. 「言」「糸」「女」「雨」など、漢字の部首の意味がわかる
11. 「へん」「つくり」「かんむり」「あし」「にょう」など、漢字の部首がわかる
13. 「青」「可」「義」など、漢字の音読みをあらわす「音符」がわかる
39. 「糸へん」「雨かんむり」「門がまえ」など、よく使われる部首の漢字が書ける
40. 知らない漢字でも、「音符」が含まれている漢字なら、読み方が推測できる

漢字の構成要素に関して、メキシコ42名の評価結果を図13に、韓国39名の評価結果を図14に示す。

図13と図14を見ると、部首に関して(10、11、39)は、メキシコの学習者の方が韓国の学習者より「わかる」と強く思っている者が多いことがわかる。非漢字圏であるメキシコでは、日本語教育の現場で部首が教えられている可能性があるのに対して、韓国では、そういった知識があまり教えられていないからという可能性もある。

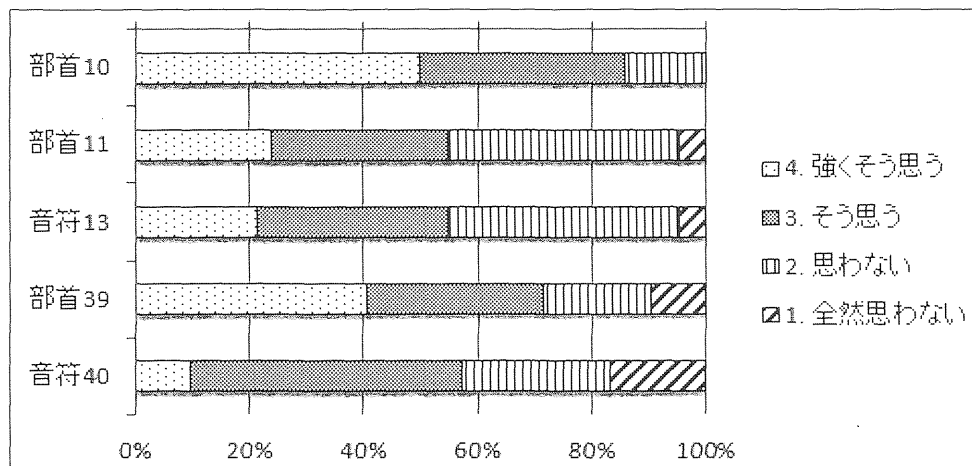


図13 漢字の構成要素に関するCds項目の評価(メキシコ42名)

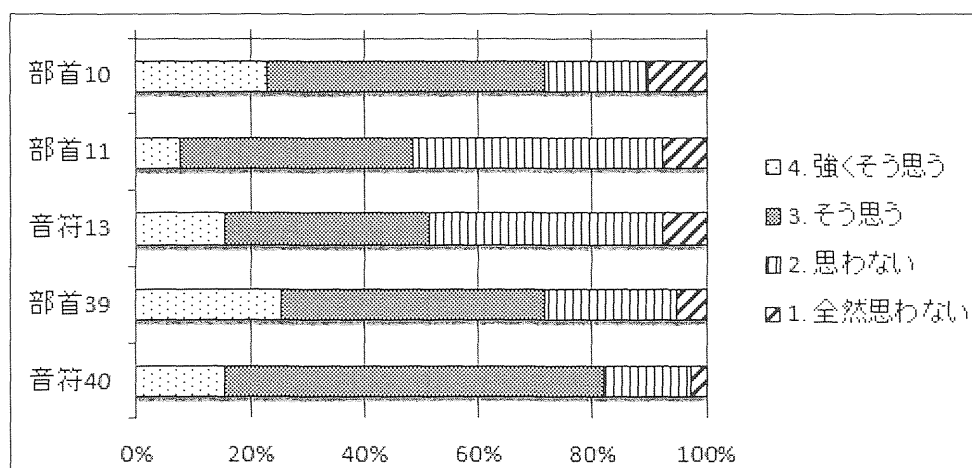


図14 漢字の構成要素に関するCds項目の評価(韓国39名)

一方、形声文字の音符については、13の結果は、両グループとも同様であったが、40の結果は、韓国の学習者の方が肯定的評価が多いことがわかる。これは、韓国が漢語文化圏であることと関係がある可能性もある。

しかし、これらについては学習者自身にフォローアップインタビューなどをして確認する必要がある。

今回の調査の項目毎の結果をまとめると、意味に関する13項目、読みに関する17項目、書きに関する5項目、用法に関する10項目、構成要素に関する5項目のそれぞれにおいて、中上級の学習者のほとんどが「できる」という評価をしている項目と、否定的評価が多くなっている項目があるということがわかった。



漢字の意味については、13項目中、10項目は肯定的評価が多かったが、残りの3項目には否定的評価も見られ、メキシコの調査協力者と韓国の調査協力者の評価結果はかなり共通していた。読みに関する17項目についても、11項目は肯定的評価が多かったのに対して、6項目では否定的評価が見られた。書きに関する5項目では、ワープロによる書き以外は否定的評価が多いところが両グループに共通していたが、項目によって選択肢の割合には若干の違いが見られた。用法に関する10項目については、漢語文化圏である韓国の学習者と、非漢字圏であるメキシコの学習者の間に微妙な違いが見られ、漢語知識の影響である可能性が窺えた。しかし、それが文化圏による違いなのか、運用力のレベルによる違いなのかは、不明である。また、構成要素に関する5項目については、意味や読みに比べると、評価が低くなっているところが共通しているが、韓国の学習者の方がメキシコの学習者よりも否定的評価が多いのが特徴的であった。非漢字圏であるメキシコでは、漢字を学習する際の負担を軽減するために、部首や音符などが積極的に教えられている可能性があるのに対して、韓国では、そういった構成要素の知識があまり教えられていないのではないかとと思われるが、現時点ではまだ推測の域を出ない。

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、2013年6月～10月の間に韓国およびメキシコで実施した漢字テストおよび漢字に関するCds形式による意識調査の結果を報告し、2013年2月～3月に国内で実施した同様の調査の結果と比較しながら、文化圏による評価の異なり、運用力のレベルによる異なりなどについて検討した。非漢字圏の学習者は、得意な項目と苦手な項目の間にはっきりとした評価差が出るのに対して、韓国の学習者は、中国の学習者ほどではなかったが、各項目間の評価差があまり出なかった。これは、自己評価のトレーニングを積むことによって解消されうる問題なのかどうか、さらに検討する必要がある。

また、前回の調査ではできなかった、Cds項目毎の評価結果の検討を、意味、読み、書き、用法、構成要素のそれぞれについて行った。海外で行った調査の協力者と、国内で行った調査の協力者の間にはかなりの運用力の差が認められたこと、また学習環境の違いなども厳密には考慮すべきであろうが、全体的な評価結果には共通する点も見られ、学習者による漢字力の自己評価として一定の傾向が見られることが確認された。

今後は、同一環境における漢字圏学習者、非漢字圏学習者および韓国の学習者を対象に調査を続け、調査協力者数を増やすとともに、量的調査だけでなく質的調査も行いたい。調査協力者たちに、実際に何を考えて自己評価を行っていたのか、フォローアップインタビューを行う必要もあると思われる。

さらに、今回の調査で使用したCds項目は、初級および中級において想定される漢字・漢字語彙の学習項目から採ったものであったため、中上級者の場合は全般的に「できる」

評価が高くなっていた。したがって、中上級、上級における項目の妥当性を検討するとともに、さらに上級者向けのCds項目を作成する必要があるだろう。

※この研究は、平成26年度科学研究費補助金基盤研究(B)「日本語教育スタンダードにおける漢字力の評価に関する研究」(研究課題番号:23320102)からの助成を受けている。

#### 注

1. 実際の調査紙の質問項目は加納(2014a)の【資料4】に載せてある。
2. 漢字SPOTテストは、自然な速度の音声を聞きながら、与えられた文中の漢字語彙の部分に空欄を設け、漢字を1字選択して入れさせるという形式のテストである。小林らにより開発されたSPOTのテスト形式を利用して、漢字語彙の運用力を測るテストとして開発された(加納2009, 2000)。今回の調査では、WEB上で受験可能な漢字SPOT 50というテストを受験させた。
3. 今回の調査では、漢字SPOTテストと同時に、中級の漢字力診断テスト(漢字の読み書きの力だけでなく、字形認識、意味理解、漢字語の語構成、文脈による用法、品詞、送りがな、音読み力などを12の項目でチェックし、その診断結果をフィードバックするもの。加納ほか(1993)およびの加納・酒井(2003)を参照。)も実施した。ただし、本稿では、漢字力診断テストの結果は調査協力者の絞り込みのために参照するに留め、分析の対象とはしていない。

#### 参考文献

- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智(1993)『Intermediate Kanji Book』vol.1、凡人社
- 加納千恵子・酒井たか子(2003)「漢字処理能力測定テストの開発」筑波大学留学生センター『日本語教育論集』18号:59-80
- 加納千恵子(2008)「レベル別漢字語彙処理能力テストの問題形式—WEB漢字テストのマルチレベル化に向けて—」筑波大学留学生センター『日本語教育論集』23号:1-13
- 加納千恵子(2009)「漢字語彙の音声処理能力を探る—漢字SPOTの開発と課題—」筑波大学留学生センター『日本語教育論集』24号:1-17
- 加納千恵子(2014a)「漢字に関するCan-do Statements調査から見えてくるもの—漢字の知識と運用力についての学習者意識—」筑波大学留学生センター『日本語教育論集』29号:71-92
- 加納千恵子・魏娜(2014b)「外国人日本語学習者の漢字力の評価について—TTBJ(筑波日本語テスト集)を利用して—」『JSL漢字学習研究会誌』6号:54-62

- 加納千恵子 (2014c) 「Can-do Statementsによる漢字力の評価について」 ヨーロッパ日本語教師会 『ヨーロッパ日本語教育』 18 : 115-120
- 国際交流基金 (2010) 『JF日本語教育スタンダード2010』
- マリア ガブリエラ シュミット・長沼君主・ファーガス オドワイヤー・アレクサンダー  
イミック・境一三編 (2010) 『日本と諸外国の言語教育におけるCan-Do評価 —ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) の適用—』 朝日出版社
- 村上京子・加納千恵子・衣川隆生・小林典子・酒井たか子／関正昭・平高史也編 (2013)  
『日本語教育叢書「つくる」テストを作る』 スリーエーネットワーク